

建築歴史・意匠部門 一研究協議会

建築論の問題群〈思索と制作〉

―増田友也の風景論とその現代性

[資料あり]

9月13日(水) 9:00~12:30 法経済学部本館 第4教室

司会 坂牛 卓(東京理科大学)

副司会 木内俊彦(dsdsA)

記録 片桐悠自(東京都市大学)

1.主旨説明 田路貴浩(京都大学)

2.主題解説

①増田友也建築論の現代的意義

藤原 学(京都大学)

②都市史の視点から

岩本 馨(京都大学)

③建築家の視点から

山村 健(東京工芸大学)

3.討論 コメント：西沢立衛(横浜国立大学)

4.まとめ 末包伸吾(神戸大学)

建築論・建築意匠小委員会では、建築論・意匠論の現代的かつ普遍的な課題を掘り起こし再考することを目的として、連続研究会「建築論の問題群」を開催している。2018年3月のキックオフ以来、「建築の自律性／他律性」、「社会性」、「自然」、「形態言語」、「聖」、「建築の時間性と素材性」、「技術」、「イメージ/情報/メディア」と議論を積み重ねてきた。今回は、この連続研究会の一環として、「思索と制作」をテーマに取り上げる。

京都大学で教鞭を執りつつ、建築設計と建築論研究に従事した増田友也(1914-1981)は、まさに考えることと作ることの両輪を実践した。増田は打放しコンクリートで日本的空間を追求したモダニズム建築家である。また、1950年に同大学の講師に赴任すると、村田治郎のもとで日本の古代住宅の研究に着手し、1950年代には空間論、1960年代には風景論、1970年代は建築の存在論に取り組んだ。本協議会では、このうちの風景論に焦点を当てる。

オリンピック・イヤーの1964年、10年近く行われた留学生への講義をもとに草稿「日本の住宅の空間的考察」が執筆された(没後1987年に『家と庭の風景』として出版)。当時、京都では京都タワー建設を巡って景観論争が世間を賑わせていた。また増田自身は、京都東

山の風致地区内に、斜面を削って建造する浄水場の計画に取り組んでいた（京都市蹴上浄水場、1962 年完成）。そうした時代状況のなかで、増田は「風景」を問題にした。増田は孤高の建築家ではなく、時代状況に鋭く反応する建築家だったのである。そしてその建築制作は、稲垣栄三との親しい交流からも伺えるとおり、日本建築史の深い学識にもとづいていた。

本研究協議会では、増田が建築家として日本の建築空間や風景をどのように捉え、どのように建築設計へ繋げたのかを探りつつ、その現代的な可能性を探っていく。建築論研究者、建築史研究者、建築家による自由な討議を、まさに思索と制作の交錯の場としたい。